

あけのほし 2014年4月

## 「聖書との出会い」

菊田行住

主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』

(マタイによる福音書20章13-15節)

わたしの幼い記憶の中に、元旦になると、眠たいまぶたをこすりながら両親に連れられて比延山延暦寺に登った記憶が残っています。とても寒い中、凍った斜面を滑らないように、護摩炊きの炎の所に向かって登って行きました。小学校2年生まで暮らしていた滋賀県では、古いお寺が山の中にいくつかあって、そこにも良く家族で出かけて行きました。思えば、見えない存在への畏れと敬いの思いが、自然と身に付いていたのだと思われま

す。そんな小さい時の記憶の中で、特に鮮明に残っているのが、母方の「おばさん」が、わたしのために祈ってくれたお祈りです。歯が痛くて泣きわめいていたわたしを抱きかかえて祈ってくれた祈りは、天国のおばあちゃんに向かったものでした。おばあちゃんが大丈夫だよ、大丈夫だよと、言っていてくれるから、安心しなさいと、慰めてくれました。

そのような環境で育ったので、それから初詣の時などに、神社やお寺に行くと身が引き締まり、いつも神さまが見ているのだから、まじめに今年は生きようと、その時だけ思ったものでした。

そんな漠然とした思いの中で、あまり大きな人生の壁にもぶつからなかったところ、いよいよ高校3年生を迎え、大学受験を目前とした時、わたしは自分の人生を、始めて本当に選択しなくてはならない岐路に立たされたのです。それまで、自分は「今を生きるのだ」といって、その日暮らしをしていました。将来の目標なんてなく、嫌いな勉強をテスト前に嫌々取り組むということが、わたしの人生設計のすべてでした。留年したり、退学するのは嫌だけど、かといって本気で大学で学びたいことなど、何もありませんでした。

わかしげ受験をして、大学に行く道を選択しましたが、それも、大変消極的な理由で、今の自分か社会に出て働けるわけがないからという動機からでした。そんな高校生の時からモラトリアム人生を歩んでいたわけですから、受験がうまく行くはずはなく、2年間浪人して、ようやく大学に進むことが出来ました。

しかし、そんな停滞した十代の終わりの期間でしたが、そんな中でそれまでの人生観が、全く変わってしまう経験も、していたのです。国語の問題集の中に、哲学者のニーチェの文書がありました。そこには、「神は死んだ」のだと、ありました。細かい内容は覚えていませんが、その文書を読んだ時、そんな見えない神さまという存在に頼っていないで、こ

れからは、自分自身の足で、すべての責任を負って生きて行かなくてはならないんだと、強く考えるに至ったのです。大きな不安と恐れが襲ってくる一方で、これからは自分の人生は自分で担うんだという目標が生まれて、始めて自覚的な人間になれたように思えました。それからというものは、「神が死んだ」世界を、自分の力を頼りに、生きるようになったわけです。

この時期に、同時に起こった出来事の中に、始めて社会の矛盾を意識するということがありました。今、まさに大人の仲間入りをしなくてはならないという時に、そのことに抵抗するように、親も含めた大人たちの欺瞞に満ちたあり方に、憤りを自覚し出したのです。それまで、自覚をしていなかったこの世界の生きずらさの原因が、大人からの不誠実な生き方の中にあるのだと気づいて、なんとか良い世界にしたいという理想が、芽生えたのもこの時期でした。それはわたしにとっては、誰もが自由に生きられる世界という漠然とした感覚でした。そのことを、「神は死んだ」という感覚と繋げると、わたしたちの世界は、わたしたち自身の責任によって、良いものにして行かなくてはならないのだという自覚となって行ったのです。

しかし、理想に燃えている自分と、現実のわたしの姿は大きく乖離していました。親に向かって偉そうなことを並び立てている一方で、その親に養われて、モラトリアム人生を長く過ごしていたわけです。

そんな中、わたしが始めて聖書と出会ったのは、大学の2年生の時です。キリスト教主義の大学でしたから、キリスト教概論という必修の授業がありました。興味がなく、単位を落としていましたが、とうとう今年こそは取らなくてはならないという所まで追い込まれたので、渋々授業を取りました。

しかし、予想に反して、その授業は大変興味深いものでした。その担当教授は、聖書に限らず、人は自分が見たいように世界を見るのだという内容のことを、授業で展開して行きました。聖書も、神の言葉が書いてあるというのが、実は、それを読む側の意図によって、読みたいように読んでしまうのだと言うのです。人は、ちょうど濃いサングラスをかけて世界を見ているようなもので、世界そのものを見ているのではないという言葉が、とても新鮮でした。聖書も、「これこそ神さまからのメッセージです」と断言することはできずに、必ずそこには人の視点によって曲げられている部分があるのだというわけです。それまで、キリスト教に嫌悪感こそ持っていて、好感を抱いていないわたしにとって、キリスト教を見直すきっかけとなった出来事です。ただ、だからといってそこから聖書を読むようになったわけではありません。それまでの価値観を大きく揺さぶられる体験はしましたが、わたしが更に、大きく変わって行くのは、もっと沢山の出会いを通してでした。

わたしが初めて、自覚的に聖書を読むことになったのは、大学3年生の夏のことでした。冒頭の聖書の箇所との出会いが、わたしが聖書そのものと出会った初めての体験でしたが、それは、横浜にある通称「ドヤ街」と呼ばれている、日雇い労働者と行き場を失った人々が集まる「寿街」の中でのことでした。(次回に続く)